

機関番号：14501

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20730426

研究課題名（和文） 教示行為による知識・技能の伝達過程の発達と障害：健常幼児と発達障害児の比較から

研究課題名（英文） The development of transmission of the knowledge and skill by teaching behavior: From the toddlers and children with developmental disorders

研究代表者： 赤木 和重 (AKAGI KAZUSHIGE)

神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号：70402675

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、教示行為の観点からみた知識・技能の伝達過程を明らかにすることであった。小学校・特別支援学級で継続的に観察を行なった。また7か所の保育園・障害者作業所で実践検討を行った。その結果、(1) 発達的に2歳代の自閉症児においても、他児に対して教示行為を行うことが明らかになった。また、(2) 成人期障害者どうしにおいても教示行為を通して技術が伝達されることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to investigate the transmission process of the knowledge and skill in the typical developing children and the children with developmental disorders children. The results are the follows. The children with autism whose developmental age was 2 year olds could teach other children. Additionally, the adults with autism could teach each other and the skill of the work were transmitted.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	800,000	240,000	1,024,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：教示行為，相互作用，発達障害

1. 研究開始当初の背景

近年、ヒトとチンパンジーを対象とした比

較認知科学研究から、ヒト固有の心理的特徴を明らかになってきた。これまでの研究から、チンパンジーは、三項関係的なコミュニケーションを示しにくいことが指摘されている。このような現状のなかで、ヒトとチンパンジーの違いとして一貫して指摘されているのが、「教える」という教示行為である。チンパンジーにおいては、他者に積極的に何かを教える積極的教示行為 (active teaching) は非常にみられにくい。以上から、教示行為は、ヒト固有の行為として判断でき、重要なテーマであるといえる。

このような重要性を背景に、教示行為の発達について、いくつかの知見が明らかになってきた。1 つは、定型発達幼児の場合、1 歳半を越えると、積極的教示行為が生起することである (赤木, 2004)。2 つは、自閉症児・者の場合、定型発達児に遅れ、発達的に 3 歳を超えると、積極的教示行為がみられるようになることである (赤木, 2008a)。3 つは、他者の技能の獲得のためにあえて教えずに見守るといったいわば「教えないという教え方」は、定型発達児の場合、小学 4 年生ころから可能になることである (赤木, 2008b)

以上のように定型発達児や、障害児における教示行為の発達について、研究は少ないものの、基礎的な資料がそろいつつある。しかし、問題点もある。これまでの研究はいずれも、対大人や仮想場面での子どもの行動を尋ねるものであった。そのため、日常の場面のなかで、教示行為がどのようにみられるのかという視点が希薄であった。その結果、教示行為が行われる本来のねらいである仲間同士における知識・技能の伝達過程がどのようなものかは明らかにされていない。そこで、本研究では、教示行為によって、知識・技能の伝達がどのように行われるのか、そして、発達障害 (とくに自閉症) の子どもにおいては、どのような特徴がみられるのかを検討する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、健常幼児および発達障害児者を対象とした教示行為の観点からみた知識・技能の伝達過程の起源を明らかにすることである。特に、健常児および知的障害のある障害児者を対象にする。このことで、教示行為による知識・技能の伝達過程の起源に焦点をあてることが可能となる。

また、これまでは「教えられる存在」ととらえられる傾向が強かった発達障害児においても、知識・技能の伝達を、大人という熟達者から直接教えられるだけでなく、幼児・発達障害児同士で、能動的に知識や技能を習得していく過程やその障害について明らかにできることが予想される。

3. 研究の方法

(1) 特別支援学級における授業観察

京都市内の小学校特別支援学級において授業観察を行った。在籍児童は 4 名で、全員、知的障害のある自閉症児であった。小学校 2 年生 A 児 (女児) は、発達年齢が 2 歳 5 カ月であった。小学校 3 年生 B 児 (男児) は、発達年齢が 3 歳 3 カ月であった。小学校 6 年生 2 名 C 児、D 児の発達年齢はそれぞれ、6 歳 3 カ月、7 歳 1 カ月であった。2 年間にわたる授業観察を行った。方法は、ビデオカメラを用いて、授業観察を行った。また、フィールドノートも併用した。

(2) 障害者作業所・保育園における保育・障害者福祉実践記録をもとに、教示行為についての検討を行った。大阪府にある 7 か所の障害者作業所の職員と共同で実践検討を行った。職員が執筆した実践記録をもとに相互に議論するなかで、障害者どうしの相互作用場面、特に教示行為が生起する場面に注目し、検討を行った。

4. 研究成果

(1) 特別支援学級における授業観察の結果から、年長者の自閉症児 C 児 (小学 6 年生) が、年少者の自閉症児 (小学 2 年生) に、自発的に学習を教える行為がみられた。また、その際、年長の自閉症児が解き方を実際に見せるだけでなく、言語でヒントを出したり、ほめたりするなど言語レベルでのより高次の教示行為がみられた。

また、小学校 2 年生の A 児、小学校 3 年生の B 児においても、授業の展開のなかで、教壇に立ち、他の児童に対して、発問したり、自己の解答を説明したりするなどして「教師」役を遂行することができた。

さらには、年少の自閉症児 (小 2・小 3) は、年長の自閉症児 2 名 (小 6) の授業中にみられる特定の発話や身振りを自発的に模倣し、それが子ども全員に「ブーム」として定着することが 9 月以降みられるようになった。

以上のことから、社会性に障害があるとされる自閉症児においても、子どもどうしの間においても、教示行為が見られることが明らかになった。とくに発達的に 2 歳代の自閉症児においても、情報提供的な側面が中心ではあるが、教示行為が生起したことは意味のあることといえる。

ただし、このような教示行為の頻度は、毎時間の授業でみられるわけではなく、意図的な支援が必要であることも明らかになった。具体的には、2 つの支援が必要であることがわかった。

1 つは、子ども同士で「教える—教えられる」関係が生起するために、授業内容を役割化・パターン化させることが必要であった。

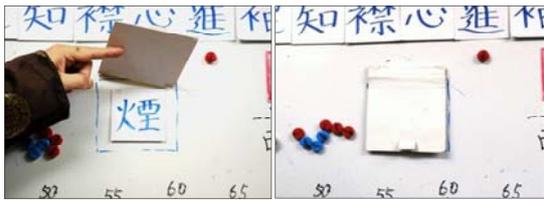


図1 ふためくり式カード

子どもが他の子どもに教えやすいように、図1のようなふためくり式カードなどが授業のなかで用いられていた。このカードを使うことにより、子どもが問題を出すときには、本人にも他児に見えないため、出題に専念しやすい利点がある。他にも、子どもが発問する際にはどのような形式で発問するのかを明確に伝える工夫がなされていた。

2つは、教具や教室環境など子どもをとりまく環境を工夫することが必要であった。



図2 指示棒

図2に示すように、子どもが教える際には、多くの指示棒を用意して、相手に教示しやすくなる工夫や意欲を高めることがある。

また、子どもが教えやすいように教室環境を整えることも重要であった。図3は、子どもが教壇に立って教えやすいように、通常の教室よりも30センチメートル低く白板を設置している。このことで、子どもは無理なく、指示棒を使うなどして教示行為を行うことができた。



図3 通常より30センチ低い白板

これらの知見を含めた研究成果を含めて、本研究の対象学級の担任であった村上公也氏と共同で、『キミヤーズの教材・教具：知的好奇心を引き出す (DVD 付)』（クリエイツかもがわ）を出版した。

(2) 保育・障害者作業所の実践検討からは、主に障害者作業所において、興味深い知見が出された。20歳の自閉症のある男性と、32歳の自閉症の男性が、これまでは別々にしてきたが、一緒に下請けの仕事をするなかで、様々な相互作用がみられるようになったことが報告された。20歳の男性が、仕事の詳しいもう1人の男性に仕事の様子を尋ねる姿があった。そして、尋ねられたもう一人の男性が、仕事の方法を教え、またきちんとできたかどうかを確認するような姿がみられ、その後、両者で達成感を共有する姿がみられた。

この知見は、成人期で、知的障害のある自閉症者においても、教示行為が生起し、そのことを通して知識・技術が伝達されることを示しているといえる。

ただ、そこには、職員が、障害者どうしの相互作用を活性化しようとする意図的な支援があったことも考慮にいれておく必要がある。

これらの知見を含めた研究成果を含めて、研究協力者であった社会福祉法人コスモスと、『見方が変われば願いが見える：保育・障害者作業所の実践を拓く』（クリエイツかもがわ）を出版した。

今後の課題としては、仮説検証的な研究をすすめることである。今回の研究では、実践現場と結び付きながら興味深い行動事実を報告することができた。

しかし、このような行動が、どのような要因のもとで生起するかを明らかにするには、実験的な研究を実施していく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

①坪田吉巨・赤木和重・松浦均(2011) 小学校高学年における学級集団の形成過程：他者受容感を育てる子どもどうしの「支え合い」 三重大学教育学部紀要, 62, 235-256.

【査読無】

②赤木和重(2009) 教える行動からみえてくる社会的知性：霊長類の比較発達心理学, 118, 104-111. 【査読無】

③赤木和重・北口美弥子(2008) 激しい器物破壊行動を示した自閉症者に対する支援：対人関係の発達および衝動性の緩和に注目して 人間発達研究所紀要, 20・21, 92-102. 【査読有】

④赤木和重(2008) 自閉症における「障害特性に応じた教育」再考：障害特性に応じた

つ、障害特性をこえていく教育へ 障害者問題研究, 36, 180-188. 【査読有】

- ⑤赤木和重 (2008) 幼児における抑制的教示行為の発達:「教えないという教え方」は可能か 発達研究, 22, 107-115. 【査読無】
- ⑥赤木和重 (2008) 知的障害のある青年期自閉症者における積極的教示行為の発達と障害:行為主体としての自他分化に注目して 三重大学教育学部研究紀要, 59, 163-176. 【査読無】

[学会発表] (計5件)

- ①坪田吉巨・赤木和重 (2010.09) 学級集団づくりにおける他者受容感の形成過程 日本教育心理学会第51回大会発表論文集, 350. (於 静岡大学)
- ②赤木和重・北口美弥子 (2009.03) 激しい器物破壊行動を示した自閉症者への支援:対人関係の発達および衝動性の緩和に注目して 日本発達心理学会第20回大会発表論文集, 558. (於 日本女子大学)
- ③赤木和重 (2009.03) 教示行為の発達:その進化的基盤 日本発達心理学会第20回大会発表論文集, 32-33. (於 日本女子大学)
- ④赤木和重 (2008.11) 特別支援教育における個別指導と集団づくり 日本パーソナリティ心理学会第17回大会発表論文集, 14-15. (於 お茶ノ水女子大学)
- ⑤赤木和重 (2008.09) 青年期・成人期発達障害者の支援に発達研究はどのように貢献できるか?日本特殊教育学会第46回大会発表論文集, 41. (於 米子ビッグシップ)

[図書] (計8件)

- ①村上公也・赤木和重 (2011) キミヤーズの教材・教具:知的好奇心を引き出す クリエイツかもがわ
- ②赤木和重 (2010) 教示行為の発達 箱田祐司・都築誉史・川畑秀明・萩原 滋 (編) 認知心理学 有斐閣 p.375.
- ③赤木和重 (2010) 高機能自閉症の基礎理解:まずは知ることから 別府哲・小島道生 (編) 「自尊心」を大切にした高機能自閉症の理解と支援 有斐閣 pp.3-24.
- ④赤木和重 (2010) 認知の発達と内面世界 別府哲・小島道生 (編) 「自尊心」を大切にした高機能自閉症の理解と支援 有斐閣 pp.53-78.
- ⑤赤木和重・社会福祉法人コスモス (2009) 見方が変われば願いが見える:保育・障害者作業所の実践を拓く クリエイツかもがわ
- ⑥赤木和重 (2009) 自閉症の発達の理解と発達診断:発達の1歳半頃に焦点をあてて 白石正久・白石恵理子 (編) 『教育と保育のための発達診断』全障研出版部 pp.83-97.

⑦赤木和重・佐藤比呂二 (2009) ホントのねがいをつかむ:自閉症児を育む教育実践 全障研出版部

⑧赤木和重 (2008) 違うけど同じ自己:高機能自閉症児の思春期 都筑学 (編) やさしい発達心理学 ナカニシヤ出版 pp232-246.

[その他]
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

赤木 和重 (AKAGI KAZUSHIGE)

神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号:70402675

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし